公益財団法人佐々木泰樹育英会

2025 年 3 月 24 日

第 6 回口語詩句賞
選考結果

■授賞対象者

大賞（賞金 100 万円）	渡邉 美愛	（筆名 さいう）
奨励賞（賞金各 10 万円）	大嶋 碧月	
	奥井 健太	
	奥村 俊哉	（筆名 長谷川柊香）
	田先 政秀	（筆名 田崎森太）
	常田 瑛子	
	松下 誠一	

■授賞対象者作品

https://www.kougoshiku-toukou.com/result/competition/38956/

■選考方法

第 6 回口語詩句賞実施要領に基づき、口語詩句投稿サイト 72h（www.kougoshiku-toukou.com）の投稿者に対して、下記の方法で選考を行った。

一次選考　今回投稿期間中の投稿者のうち、投稿 20 作以上で選考対象となる者から、選考委員各自が大賞候補者 1 名（選評および参考作品 20 作）、奨励賞候補者 2 名（参考作品各 10 作）を選出した。

二次選考　一次選考の結果をもとに、選考委員全員参加の選考会における議論を経て、大賞候補者のうち 1 名を大賞、その他を奨励賞の授賞対象者とした。さらに議論を重ね、奨励賞候補者から若干名を奨励賞の授賞対象者に加えた。

＊投稿期間　2023 年 11 月 1 日～2025 年 1 月 31 日

＊投稿者総数　1,022 名（19,274 作品）

＊選考対象者数　261 名（14,463 作品）

■選考委員

暮田真名（川柳人）、小島なお（歌人）、杉本真維子（詩人）、高橋修宏（俳人・詩人）、立花 開（歌人）、西躰かずよし（俳人）、林 桂（俳人）、龍 秀美（詩人）

■一次選考結果

一次選考として、各選考委員が選考対象者261名から、大賞候補1名（選評および参考作品20作）と奨励賞候補2名（参考作品各10作）を選出。これをもとに二次選考である選考会で議論をし、各賞を決定した。選考会の議論は文章化し、佐々木泰樹育英会ホームページで、2025年5月公開予定。

筆名	期間中作品数と内訳 （詩・俳句・川柳・短歌・アフォリズム）	評価　（大賞候補◎　奨励賞候補○）								集計	
		暮田	小島	杉本	高橋	立花	西躰	林	龍	大賞候補	奨励賞候補
長谷川柊香 （宮城県、25歳）	90 （2・87・0・1・0）						◎		○	1	1
さいう （石川県、20歳）	99 （3・8・4・84・0）				◎		○	◎	◎	3	1
松下 誠一 （東京都、22歳）	144 （0・5・97・42・0）		○			◎				1	1
大嶋 碧月 （兵庫県、25歳）	120 （20・29・8・61・2）			◎						1	0
常田 瑛子 （山口県、38歳）	193 （3・1・0・189・0）		◎	○						1	1
奥井 健太 （滋賀県、22歳）	67 （0・66・0・0・1）	◎								1	0
杢いう子 （佐賀県、41歳）	91 （0・89・2・0・0）				○					0	1
田崎森太 （東京都、74歳）	226 （0・226・0・0・0）				○					0	1
吉沢 美香 （宮城県、25歳）	87 （0・87・0・0・0）	○					○			0	2
玻璃 （愛媛県、24歳）	154 （5・146・0・3・0）					○				0	1
日下部 友奏 （群馬県、19歳）	82 （0・71・4・7・0）							○		0	1
azusa （京都府、23歳）	85 （1・56・0・28・0）							○		0	1
雲理そら （大阪府、19歳）	200 （1・0・26・173・0）		○						○	0	2
桜庭 紀子 （和歌山県、42歳）	141 （0・1・40・100・0）			○						0	1
牛田 悠貴 （東京都、27歳）	63 （1・2・52・3・5）	○								0	1
絵巻 （東京都、63歳）	39 （0・37・2・0・0）					○				0	1

※作品ジャンルは投稿時の本人の選択に基づく

■一次選考結果（選評・参考作品）

※参考作品は候補者の期間中投稿作品から各選考委員が選出（投稿順）

暮田真名

[大賞候補] 奥井 健太

1　目覚めてもまだ風船は天井に
2　マクドナルドの空の壁紙水温む
3　春炬燵腹にたまらぬビッグカツ
4　ヨッシーの卵割れない四月です
5　鳥帰る英語にすれば長くなり
6　たんぽぽを吹かせて貰う間柄
7　苺狩り詩集一冊分費い
8　同僚にロボットがいる南風です
9　レンタカーに四人乗り込む
　水着のまま
10　本も食事も同じ机の花野です
11　住んでもう大阪恋し熱帯魚
12　子供にも諍いのありカブトムシ
13　爽やかに今日予約して今日の宿
14　冬近く遅れ始まるバンドです
15　冬ぬくし刺繍の鳥は永遠に飛び
16　燃えるものばかりの部屋を冬の蝿
17　引越しのこと話し合う裸です
18　まとめ捨て
　ハンドクリームの缶を冬
19　浮寝鳥戦争に布使われて
20　猫も人の言葉分からず実南天

＊選評

よく遊び、よくバイトする。奥井の俳句から窺える人物像はいかにも「現代の若者」然としている。

レンタカーに四人乗り込む
水着のまま

爽やかに今日予約して今日の宿

アウトドアのレジャーを好んでいるらしい。「水着のまま」「今日予約して」の無鉄砲さ、向こう見ずさが眩しい。

本も食事も同じ机の花野です

マクドナルドの空の壁紙水温む

春炬燵腹にたまらぬビッグカツ

部屋に机は一つしかなく、ぺらぺらしたものを食べる。奥井の句には時代に蔓延する貧しさまでが正確に書き込まれているが、わたしが奥井を大賞に推す理由は彼の句の「リアルさ」のためではない。

まとめ捨て
ハンドクリームの缶を冬

奥井は「換算」の作家である。この句では、ごみの日にまとめて出すハンドクリームの缶の数が冬の長さをはかる単位になったような感覚がある。

苺狩り詩集一冊分費い

レジャーにかかる費用が書籍代と天秤にかけられている。「AをBに置き換えたらどうなるだろう」という思考が常にバックグラウンドではたらいているような奥井の句にとって、お金が格好のテーマになるのは必然だ。

浮寝鳥戦争に布使われて

このような句に、奥井の美質がもっとも表れている。距離的に遠い戦争を、「布」を手掛かりに自らに引き寄せて考える。軍服、包帯、兵舎のベッドシーツ。戦争にはどれだけの布が費やされるだろう。戦争を想起させる単語として頻繁に使われる「鉄」に比べて、「布」には女性的な（非ケアの）イメージがあるのも興味深い。

同僚にロボットがいる南風です

ファミリーレストランの配膳ロボットだろうか。書きぶりはユーモラスだが、人間がロボットに代替されること＝自分が代替可能な存在であることへのひんやりとした予感もある。

鳥帰る英語にすれば長くなり

猫も人の言葉分からず実南天

「換算」を言葉で行えば「翻訳」になる。日本語と英語。人の言葉と猫の言葉。置き換えることで失うもの、新たに加わるもの。伝わること、伝わらないこと。

冬ぬくし刺繍の鳥は永遠に飛び

「Aを見てBへ」という連想に流れず、一点を見つめた描写にも確かな力がある。刺繍糸の一本一本が飛んでいる最中の鳥の張り詰めた筋肉であるかのように感じさせる実景が、「永遠に飛ぶ鳥」という観念的で激しいイメージと釣り合っている。

目覚めてもまだ風船は天井に

昨晩家に持ち帰った風船が、起きても天井にある。実際に起こり得る景なのになぜか夢の続きのような気配があるのは、「替わられずにそこにある」ということを心のどこかで不思議に思っているからだろう。

冬近く遅れ始まるバンドです

引越しのこと話し合う裸です

ヨッシーの卵割れない四月です

「です」という文末の多用も特徴的。口語新かなで俳句を書くにあたり、自分なりの切れ字表現を発見するための試みと読んだ。

【奨励賞候補】 吉沢 美香

1 噛み合わせこれでいいのか雪の原
2 石鹸玉ちゃんと自信がある友達
3 地肌揉むと地肌動くぞ夏の星
4 夏の星欠伸の後に涙でて
5 夏の雨ほつそり伸びる祖父の脚
6 シャンデリアの
ような腹痛抱え昼寝
7 歌わせてくれる友達薄紅葉
8 傷口を広げにいくよ流れ星
9 友達をおこる言葉が団栗なら
10 謝らない人は私よ稲の花

【奨励賞候補】 牛田 悠貴

1 人民とは人民とは流星群のこと
2 そうよ、母さんも長めに見積もる
3 もう車体感覚ぶるのはやめてよ
4 帰りの会のつづいた世紀
5 書き順に則って友達にした
6 ぐりを節約してるぐら
7 忌引きダンス
8 宴もたけなわですが断頭
9 君が代は千代ちゃんと半ぶんこ
10 手に職があって月でも懐かしむ

小島なお

[大賞候補] 常田　瑛子

1　着ぐるみに吹き込む声が震えてた
　　薄れる虹に輪ゴムを飛ばす
2　大いなる他人事だと水底で
　　籠のひしゃげた自転車を押す
3　トンネルの出口付近の横風が
　　木星に縞模様をつける
4　貝殻の模様の模写を繰り返す
　　夏、病室のカーテンを裂く
5　ひゃくねんを川べりで産み
　　目のふちを小指で掻いて
6　菜の花を摘む
　　雨乞いは雨が降るまで止まなくて
7　無駄打ちされるホチキスの芯
　　風の寝姿が砂丘と知った日の
8　六時間目の鉄琴の音
　　入れ替えた助詞が眩しい
9　食パンの耳を剥がして
　　蜂蜜を塗る
10　金木犀が燃え盛り
　　横顔を知らない人の日記を読んだ
11　歯ブラシを岸に残して
　　死に顔と寝顔を隔てる川を泳ぐ
12　死んだ蝶の羽を蟻が引き摺って
　　秋風は鍵束を鳴らした
13　ミニチュアの太陽系を包み込む
　　レインコートを燃やした匂い
14　怪物になりそうだった夕暮れを
　　綺麗に畳むための前屈
15　賞状の鳳凰枠の金箔が
　　べたべた光り地中に潜る
16　冬中の眠りを剥いで起き上がり
　　炎の色を確かめている
17　土砂降りで逃げ込む
　　野うさぎの穴は
18　養護教諭の美しい耳
　　空き瓶を洗うあいだに透明な
19　句読点へと雪は近付く
　　光らない灯台よりも無防備な
20　洗髪台で伸びる首筋
　　冬の日のエコー写真はぼんやりと
　　クリアファイルに挟まれた海
　　父の骨を磨くような朗読を
　　春の手前で終わらせたひと

＊選評

着ぐるみに声を吹き込む、目のふちを小指で掻く、ホチキスを無駄打ちする、食パンの耳を剥がす。常田瑛子さんの作品は、詩歌が囲い込む単語やモチーフの世界から、きちんと逃げ切っていると感じる。ともすれば、普遍性や情感という言葉でまとめられてしまいそうな詩歌的感傷を巧妙に避けながら、チャーミングな現実感のある行為で詠み手のまなざしを引き寄せる。

着ぐるみに吹き込む声が震えてた
　　薄れる虹に輪ゴムを飛ばす
　　大いなる他人事だと水底で
　　籠のひしゃげた自転車を押す
　　ひゃくねんを川べりで産み
　　目のふちを小指で掻いて
　　菜の花を摘む
　　雨乞いは雨が降るまで止まなくて
　　無駄打ちされるホチキスの芯

このあたりの作品は、主体あるいは作者の社会的な意識が投影されているように感じながら読んだ。バーチャル空間におけるアバターもVTuberも、着ぐるみの一種と呼べるだろうか。生身の分身としてのヴィジュアル存在に吹き込む声。その声はだれのものになるのか。輪ゴムがやすやすと虹を貫きぬけてゆくのと同じく、着ぐるみは所詮着ぐるみでしかない。けれど、虹が見られるとやっぱりうれしい。昭和百年のいま、なんてことないように時代は過ぎてゆきながら、その時間のなかに戦争も震災もあった。どこからが他人事で、どこから自分事なのか。線引きの複雑な時代をナイーヴに受け止めながら、同時に平熱で生きる感覚がある。雨乞いが戦争の喩だとしたら、終われない目的のために、どれだけの犠牲が払われたのか、私たちはわからないということだけがわかる。

金木犀が燃え盛り
横顔を知らない人の日記を読んだ

歯ブラシを岸に残して
死に顔と寝顔を隔てる川を泳ぐ

死んだ蝶の羽を蟻が引き摺って
秋風は鍵束を鳴らした

土砂降りで逃げ込む
野うさぎの穴は
養護教諭の美しい耳

たとえばアンネ・フランクの横顔を私たちは知らない。けれど彼女の日記は読んだ。本来、だれにも読まれるはずのなかった言葉を盗み読んで、そののちの世界はどう変わったか。死者と生者の岸辺は見分けがつきにくいから、歯ブラシを目印として泳ぎだす。しかし、死が連れてくる季節があって、涼しい秋風に鳴る鍵束は次の時間の順番が訪れた合図でもあるはずだ。評価や評定を行わない養護教諭の耳は、生徒の心身の声に傾けるために存在する。狩猟対象である野うさぎは穴へ逃げ込むことで一時避難できることを本能的に知っているのだ。負荷のかかっていないクリアな詩句に、社会の大きな問いがしまわれていると感じた。

【奨励賞候補】 松下 誠一

1 ひき算でかんがえないで
鹿は目をひからせて公園の全域
2 場所取りのあの日の午後を順調に
高度を下げてくるパラシュート
3 ため息が視えた夜明けの駅までの
じてんしゃの後ろをありがとう
4 爪楊枝もらえれば春つくれます
二百歳までは花しか食べれない
5 鼓笛隊だから両手で食べる雪
6 おとなしく蛍の下につきましょう
7 自己暗示とけてポプラも怖くなる
8 生きたまま雪を歩けるふしあわせ
9 ヒヤシンス同士だったと思います
10 瞼のないロボットだけで
生殖をくりかえすなら
4 みつめあうなら
逆光にトルソーがなりえる群像
5 残機から逆算しても会える人
6 渡されたカンヴァスに
7 数字だけを書く
信じていた時間が長すぎて
8 星の名を借りずに生きていける人
ばかりで講義室がまぶしい
9 波のように
やわ(らか)なものすべてには
10 あなたが建てる堤防がない
泣いていたせいで主題のわからない映画はすばらしく透明で

【奨励賞候補】 雲理そら

1 ドリーム・キャッチャー
祈るひとびとの隙間からの、
ひかりの骨格
2 冬はとおくが見えなくて、
だからぼくらはふたりで、
単純な作業
3 とんでもない日常は
もうとんでもなくないから
鳩の増殖のまち

杉本真維子

【大賞候補】 大嶋 碧月

1　焼き過ぎの葱甘過ぎの戦後鬱
2　「戦争を知らない」と言うことに
　何故、幾許かの後ろめたさがある
3　哺乳瓶の頃から
　騙され慣れてはいるので
　政権を疑ったことが無い
4　本物の毒は虹色
　虹色の毒が売られている街に虹
　神経の森がアニマを隠す夜の
5　自殖に取り掛かる百合の花
6　陰茎を割れば紳士が住んでいて
　コーヒー豆を挽いてたりする
7　離陸って
　飛行機が生まれる前は
　無かった言葉？
8　あの心臓も？
　節というからだの捉え方だから
9　眠くなったら闇だと思う
　丸写ししたっていいよ。
10　そうやって、
　殖えてきたから淋しいんでしょ？
11　あかりとり破壊しあかりふえる
　くもを殺して
　くもの巣が古くなる前に嫁ぐ
12　シャンプーの
　テスターを嗅ぐ
　（政治家は）
　サボンのかおり
　（どこの棚かな）
13　幕は下りるものではなくて
　下ろすもの
　センキュー
　アウア
　サマー　ポストモダン
14　教わったことも
　も無く焚き　無
　と　む。火　け
　こ　こかを　れ
　ういとるえ教ば
15　膣口縫合の慣習を持たない俺達の
　ひらがなにしては尖鋭な明朝体だ
16　人生の謝辞には星の／食べ物の／
　罪の／病の／悪鬼の／海の／詩の
　名も入れる
17　人の数だけ剣の術あり羅切
18　いつ唖となるかも知れず銃の鉄
19　俺はまだ
　鼠としては二流だが、
　人間としては高専卒だ。
20　ポルノ売り歩いて西へ西へ西へ

＊選評

大嶋碧月さんは、非常に公平なまなざしと世界観を持っていて、「性器」というあらゆる属性をはぎ取った剥き出しのものをモチーフに、男女だけでなく、人間、動物、物質にいたるまで、すべて等価なものとして見つめ、描こうとしている。

そのなかで差別問題にも正面から踏み込み、差別的な用語の使用にあたっては切実な問題意識と責任が感じられた。重い社会問題にも果敢に挑んでいるところを高く評価したい。

性の問題については、これまで女性性は男性によって一方的に客体化されてきたが、大嶋さんの作品においては、男性性はときにさらし上げられたりして、徹底的に客体化され、ユーモアに転じるほどだ（「陰茎を割れば紳士が住んでいて／コーヒー豆を挽いてたりする」）。

過激ではあるが、それはこれまでの女性性が受けてきた見えない暴力をあばき、告発するものであるだろう。また、性の多様性をみとめ、最終的には性の無効化を夢見ているような、どこかファンタジックなところもあり（神経の森がアニマを隠す夜の／自殖に取り掛かる百合の花）、じつに豊かで、ひろい社会批評性をもっている。また、じつにさまざまな書法も備えている。

たとえば、同時多発的「わたし」（「シャンプーの／テスターを嗅ぐ／（政治家は）／サボンのかおり／（どこの棚かな）」）。表記の鋭敏な使い分け。カタカナへとひらかれていく文字とともに、ひらかれてく心（「幕は下りるものではなくて／下ろすもの／センキュー／アウア／サマー　ポストモダン」）。さらには、以下の

ような、焚き火を囲む様子を文字の配列であらわしている視覚詩、ビジュアルポエムもある。

教わったことも
も無く焚き　無
と　む。火　け
こ　こかを　れ
ういとるえ教ば

また、「俺はまだ／鼠としては二流だが、／人間としては高専卒だ。」においては、「二流」がたくみだ。もしもここが「一流」であったら、「高専卒」と「鼠」が意味的が近づき、ひとを傷つけるかもしれない。「二流」というずらしが、それを回避させている。

そのほか、物質へのまなざし（「離陸って／飛行機が生まれる前は／無かった言葉？／あの心臓も？」）、矛盾へのまなざし（「あかりとり破壊しあかりふえる」）、種（しゅ）のさびしさ（「丸写ししたっていいよ。／そうやって、／殖えてきたから淋しいんでしょ？」）も挙げておこう。

候補者選出にあたっては、常田瑛子さんも桜庭紀子さんもそれぞれの素晴らしさがあり、ずいぶんと考えさせられた。常田さんの作品は読む者を酔わせるような美的修辞にあふれる。ただ、批評性にやや欠けており、死をテーマにした作品において美だけが際立つものもあり、少しあぶないと感じられた。桜庭紀子さんの作品におけるやさしさには目を瞠るものがあった。熟考を重ね、社会批評性において卓抜している大嶋碧月さんを推薦することに決めた。

【奨励賞候補】 桜庭　紀子

1　鳩の眼がこわいこわいと怯えつつ
その胸の虹に惹かれてしまう
2　自分の嘘が真実に見える
日があって
3　すべての日記あわてて燃やす
沸騰をつづけてくれてありがとう
4　針をさす椿の首を留めるため
石室をひらく遥かな待ち合わせ
5　既視感を
なくして見たい
6　薔薇がある
戒名を電話ボックスから授かる
7　果実に手をあてていなさい
夜は夜
8　スカートに海が欲しくて襞よせる
加害者に
9　ピンクのミトンはめてやる

【奨励賞候補】 常田　瑛子

1　花びらを製氷皿に敷き詰めて
生まれる前のドレスを作る
2　この鳥は記憶がないの
地下道で翼を洗う想像の雪
3　臨月の微睡みのなか
缶切りの擦れる音は
4　星のなきごえ
青白く眠る珊瑚を抱き寄せる
5　保健室のシーツの波間で
青空へ
6　落下してゆくシャンデリア
掻きむしるほど言葉は遠い
7　卵黄を夜空に吸われ洋皿に
死体の真似のような卵白
8　入れ替えた助詞が眩しい
食パンの耳を剥がして
9　蜂蜜を塗る
暴力がぎらぎら透ける青空は
10　すべてゴッホの筆の真似事
空が剥がれるように降る雪の日に
わたしが母を産む夢を見る
10　駅前に灯がともるまでうつ伏せた
鏡が夜を買い占めている

高橋修宏

［大賞候補］ さいう

1　じだんだを
すすきのように受け流す
母の　ほっきょくぐまのまなざし
2　にゃふ、にゃふと
ふたつ咳き込む友の手に
あぶらつやめくゲルニカの模写
3　すきだった人
に
わたしは退化して
きみは背びれものこさずに去る
4　はなびらの
点字を
たどるいもうとの
髪にながれる夜風のひかり
5　顔も知らぬ
父の生家に向かうとき
わたしウォーターリリーのつるぎ
6　むーみんのように
陽なたのあぜみちを
ぽちてぽちてと駆けるおとうと
7　くるぶしの
淡いひかりを抱き寄せて
聖書のように　ねむるいもうと
8　まみどりのひかりに溺れながら往
く理学部棟の床やわらかい

9　はなうたを紡ぐ
ことり
を
閉じ込めて
銀河 に 溺死 してしまおうか
10　うまれたての雲を
両手におどらせる
ようにあなたはピアノにふれる
11　じてんしゃで
風
をおいこす
夏の日のきみが
12　せかいのはじまりだった
あきかぜの波に
寝ぐせをそよがせて
13　こぐまのようにきょうだい走る
かーてんの
裏で
ふくらむ秋の陽の
14　焦げたバターのようなしきさい
かいじゅうの
ように
15　驟雨をなぎたおし
きみの待つ駅まで駆け抜ける
取り込んだシーツの
16　海をたゆたって
ぎんがを知っているねこのひげ
ローファーの底
すこしずつ擦り減って
そつぎょう、までの日々へ夕映え

17　せっけんの泡
ほむほむ
と生みだして
神話のようなきみの手のひら
18　叱られて
ちんまりしゃがむ
いもうとの
19　しょうにゅうどうのような沈黙
おとうとの冬
の
こどうを聴きながら
20　かむぱねるらのようにねむった
ふたりから
いつか
ひとりになる日々も
ぽたーじゅだけで生きのびてみる

＊選評

その作品（とりわけ短歌体）をつらぬく〈世界に対する裸形の眼差し〉とも呼べる観点から、さいうさんを大賞に推します。

とりわけ作者を意識したのは、八月の「まみどりのひかりに溺れながら往／く理学部棟の床やわらかい」でした。けっして奇抜な修辞や比喩が駆使されているわけではありませんが、われわれの日常において、ふいに訪れる忘れがたい光景を捉えた作品に注目しました。月次の選評では〈崇高〉という言葉を用いましたが、自らを超えた何ものかと出会う資質は、やはり詩人のものだと思います。

また、「顔も知らぬ／父の生家に向かうとき／わたしウォーターリリーのつるぎ」という比喩には、自らの存在に対する凛とした信憑を、さらに「ふたりから／いつか／ひとりになる日々も／ぽたーじゅだけで生きのびてみる」には、向日的とも言える力強い詩的倫理を受けとりました。

その一方、「きみ」と名づけられた相手（他者）をモチーフとした「じてんしゃで／風／をおいこす／夏の日のきみが／せかいのはじまりだった」など手放しの健やかな率直さ、「せっけんの泡／ほむほむ／と生みだして／神話のようなきみの手のひら」における相手の身振りに聖性を見出す眼差し、さらに「すきだった人／に／わたしは退化して／きみは背びれものこさずに去る」に見られる主客が融解するイマジネールな別離の感触など、いずれも捨てがたい魅力ある作品です。

また妹や弟、さらに猫など〈小さきもの〉に注ぐ眼差しにも忘れがたいものがあります。「くるぶしの／淡いひかりを抱き寄せて／聖書のように　ねむるいもうと」、「むーみんのように／陽なたのあぜみちを／ぽちてぽちてと駆けるおとうと」、「取り込んだシーツの／海をたゆたって／ぎんがを知っているねこのひげ」など。一、二首などは明白に直喩の表現ですが、ともすれば陳腐になりがちな修辞の際において、対象をめぐるイノセントな聖性と呼ぶべき気配を立ち上げているように思います。また、三首目の「ぎんがを知っている」という宇宙を呼び込んだ修辞にも、同様の感触を受けとりました。

たとえば、柳田國男などのフォークロアの知見を参照すると、〈小さきもの〉にこそ聖性が宿るという説がありますが、さいうさんの作品にも、原初からの基層に潜む記憶や伝承と共振するような要素が、その詩的な資質の背景にあるのかもしれません。それらも引き受けながら、現代の口語表現として定着させているという意味からも、これからの可能性に満ちた作者だと思います。

【奨励賞候補】 田崎森太

1　冬の霧〈個人〉と光るタクシー灯
2　花八手裏口を出る老詐欺師
3　ひとりいる一人の汚れ六林男の忌
4　聖樹棄てる星と雲とは箱に詰め
5　たましいの
　沖は吹雪いてターナー忌

（1851年12月29日没）

6　年暮れる老々介護のぬるい風呂
7　草青むコロポックルの置手紙
8　父の日よ父なく生まれ祖父となる
9　向日葵の折れる形に祈る人
10　ジェンダーの境界に置く寒卵

【奨励賞候補】 杢いう子

1　一斉に聖歌の喉を開け放つ
2　迫り来る飛行機の喉松林
3　靴紐をほどいて死のようなかたち
4　霜の夜の誤字に修正液厚く
5　凶作の土より黒く虫の糞
6　村人2みたいな日々の鰯雲
7　はち切れんばかりに芋虫の無邪気
8　そぞろ寒ケロイド色の国境線
9　初しぐれ本屋もおもちゃ屋も跡地
10　小春日をちよこれいとの大股で

立花　開

【大賞候補】　松下　誠一

1　会話をジャズに喩えられても暁は
肉まんを分けるにうってつけ
2　雲呑のスープをもらう朝焼けを
ココカラファインの駐輪場に
3　スニーカー磨くにきょうは集団を
はなれるイチョウさろさろと散る
4　川へきてまで煩いやつがいる街で
鳥になっても寝込むだろうな
5　ぜったいに血となり肉となる牛蒡
6　どっちにも撚れる冬の日の蛇口
7　雪だからのどが触られたがってる
8　胎内にいちまい濡れるあぶらあげ
9　僕のかみさまが結んでくれる紐
10　天国で描かれているりんごの絵
11　ちゃん付けで呼ばれてからは北枕
12　花韮とおんなじようにくたびれる
13　足あとの付かない森に来てしまう
14　生きたまま雪を歩けるふしあわせ
15　水仙になってもいいですか疲れた
16　寂しさに茄子が実っていたならば
17　助六にいなされるおなかもおなか
18　ヒヤシンス同士だったと思います
19　スイセンに満ち満ちている冬の脳
20　山茶花の散りすぎているひとの庭

＊選評

「打率の高さ」とは、作家としての安定である。表現者と作家は、似ているが違う。表現するための抒情は、私たちは誰もが多かれ少なかれ持っていて、感情の揺れがあった際に何らかの形にして生み出している。その表現は、ひとつひとつが独立しており、たくさんの点が存在する、という形になっていく。点とは、美しい。だが点とは、不安定さも含む。表現者は皆、生みの苦しみの中に沈む危険性を孕んでいるのだ。

作家ももちろん表現者であるが、その点と点を繋げる力を持った人を指すのではないか、と私は思う。「表現し続ける」体力、とでもいうのだろうか。表現と共に生きるということ。生きるとは、難しい。自身の生身の体でさえ必死になるのに、表現する心まで伴っていく必要がある。表現者として生きる幸せも、作家として生きる幸せもそれぞれあり、甲乙はつけられない。表現者のままの方がよいのに作家を目指し沈んだ人も、その逆も見てきた。「選ばれる」ことに意味を見出す必要はあまり感じないが、作者は表へと連れ出してもこの人ならば沈まないだろうという安心感、作家としての素質を持っていると感じ、大賞に推した。

①山茶花の散りすぎているひとの庭
②スイセンに満ち満ちている冬の脳
③ヒヤシンス同士だったと思います
④水仙になってもいいですか疲れた
⑤助六にいなされるおなかもおなか
⑥生きたまま雪を歩けるふしあわせ
⑦ちゃん付けで呼ばれてからは北枕
⑧胎内にいちまい濡れるあぶらあげ
⑨寂しさに茄子が実っていたならば

花を題材にし、人間の体の部位に投影をする形を好む。人間の脂こさや醜さ、植物の清浄さが混ざり合う。しかし植物の美しさに頼りすぎず、人間の肉感を手放さないところに本質を問う姿勢を感じる。②水耕栽培ができるスイセンの清浄な体内にびっちりと詰まっている「冬の脳」。思考とは、深まれば深まるほど油分を帯び、昏くなる。歯止めの効かない恐ろしさの人間故である。⑥生きるのも雪を歩くのも、作者にとっては「ふしあわせ」。では、しあわせとは？　不確かなものしかないこの世の幸不幸はすべてまやかしなのかもしれない。⑦「ちゃん付け」という屈辱によって死んだ部位がある。⑧命の喩なのか？　濡れながら在る「あぶらあげ」。未知ゆえの女性への複雑な畏怖を感じる。

意味の追求を大切にし一作ずつを丹念に描き、そこに編み込むように抒情を絡ませる。景は鮮明に浮かぶが、韻律のバランスを欠いてしまうときが稀にある。

昼の希死念慮のかけらのような痰
僕のかみさまが結んでくれる紐
喪服着崩して煙草の吸い終える
月面のねむりづらさったらないね

昼の希死／念慮、僕のかみ／さま、喪服着く／ずして、ねむりづらさっ／たらないね。

意味と韻律、どちらも追求したいが、どちらかを深めると偏ってしまうものである。作者は俳句が一番馴染む詩形なのであろうが、短歌の投稿時や恋情が絡んだ私性を表現する際、矛盾した物言いだが、無防備な修辞となる。景や他者を通した自己など、距離を取らざるを得ないものを描く力は十二分にある。今後は、離れられない自身の心というものを深く追求した作品も読ませていただきたいと思う。

【奨励賞候補】 玻璃

1　クレヨンで描きなよ
　花野なんだから
2　ふらここに
　ここと呼ばれて
　陽の在り処
3　電話越しに
　寝てたんでしょうと
　わらう春
4　ピアス穴涼し　身体に風の道
5　朧夜にわたしの泥を吸うシーツ
6　独り言増えて金魚が一つ浮く
7　ソプラノを失ってまた夏が来る
8　サルビアの赤を素描の裸婦が指す
9　胞子舞う穴の底にはママがいる
10　ぬいぐるみの内臓あったよ宵の春

【奨励賞候補】 絵巻

1　向日葵の先も向日葵別れよう
2　童顔で筋肉質よ七月は
3　きぬかつぎ
　女みたいなことばがぬっ
4　前身頃うしろ身頃の間の秋思
5　誠実な対応でした雪しんしん
6　クリスマス飾り圧縮すれば黒
7　缶詰のなかは清潔クリスマス
8　熱の手を
　シクラメンへと
　置いてみた
9　水色の空気を踏んで春隣
10　立春の腕ぶんまわし
　する化粧

西躰かずよし

【大賞候補】 長谷川柊香

1　ピアノさぼった僕を
　　殴る母
　　ねぎのにおいがした
2　初雪　死者を声から忘れる
3　月光浴びてうなじは白桃めく
4　転調の冷たい息を吸う
5　雪の声シェパードの耳動く
6　りんごの皮細く剥きつつ自死の話
7　秒針は
　　ちいさな
　　闇を
　　剥がす
8　こんぺいとう
　　水に溶かせば虹の匂い
9　バイクの音すとんと止んで寒桜
10　クレヨン指でぼかすみたいに
　　星をなでる
11　金魚は名前を付けると溶ける
12　雪解光の結晶としてあなたの手
13　鉄琴の余韻のように春の雪
14　死が光であった頃
　　心臓のような檸檬を絞った
15　君の「うん。」は
　　海風の檸檬
16　雪の日のあなたの影として生きる
17　ソファにぽつんと
　　漂着物めく
　　うつ病の
　　微笑の
　　君
18　信号無視して黄落に止まる父
19　風葬を言葉は全て蝶となる
20　生者には影許されてしゃぼん玉

＊選評

今回の大賞候補としては、さいう、吉沢美香、長谷川柊香の三名をあげた。めきめき力をつけてきている玻璃、azusa。そして新たな力のある書き手の、加那屋こあ、石村まい、川上真央など。ほか佳作数や、佳作の割合が、大賞候補以上の応募者もいたが、最終的にこの三名のいずれかが大賞候補にふさわしいと思った。

年々書き手の水準が上がってきていることから、大賞候補と、それ以外の書き手の力の差はわずかだとも言える。ただこの三名と、他の書き手とを分けたものは、自身の表現に対してどれだけ意識的であったかどうかによる。言いかえれば、この三名の作品からは、自身の表現方法に対する問いが他の応募者以上に感じられた。

たとえば、さいうの「うみかぜのはどう／を／頬に受けながら／火としてしんでしまいたい だけ」という作品。そこからは、ひらがなと、行替えを巧みに行い、自身の表現を追求している様子がうかがえる。それは、吉沢美香のつぎの作品「雪が降る／楷書のように」や、長谷川柊香の作品「ピアノさぼった僕を／殴る母／ねぎのにおいがした」にも共通する。彼らは俳句形式をベースにしながら、その表現のあり方を常に問い直している。俳句表現の方法としては定型、文語を軸に洗練を行っていくというスタンダードなものがあり、それは決して間違いではない。しかし、その在り方自体を問い直し、常にあらたな表現を模索することで、あたらしい表現が生まれてきたのも事実である。大賞候補の三名は、自身の表現の方法を見定めるとともに、常にその方法を問いなおすという点で、他の応募者より抜きんでており、それが候補として推す決め手となった。

そして最も悩んだのが一名の大賞に誰を推すかということであった。口語詩句らしさという点でいえば、さいうが最もふさわしいという見方もできた。現に良いと思った作品の数は、吉沢美香、長谷川柊香よりも、さいうの方が多かった。作品から生まれる物語性は特筆すべきものであったし、表現形式への問いという意味でも両者にひけをとっていない。しかし、それでも大賞には長谷川柊香を推した。確かに、彼の各々の作品には完成度にばらつきがあり、時に安易な表現も見られたが、それを補ってあまりあるほどの作品がいくつかあった。生の意味を問うことからはじまる深い沈黙は、彼ならではものもではないかと思う。それらの作品をいくつか紹介し、この選評のしめくくりとしたい。

金魚は名前を付けると溶ける
雪の声シェパードの耳動く
りんごの皮細く剥きつつ自死の話

【奨励賞候補】 さいう

1 ゆめを見る
ように
あなたの手にふれて
死すら
とおくの銀河でもえる
2 うみかぜのはどう
を
頬に受けながら
火としてしんでしまいたい だけ
3 神託を受けた
しょうじょの顔をして
ほっとけーきのようにめざめる
4 ねこの耳
に
在る秋風をくすぐって
まださよならがすきだと思う
5 ぺんぎんの
ひなを
ふたりで見つめれば
むごんに春のひだまり満ちる
6 斜陽転じてぼくだけのぺるせぽね
7 おうごんの
うぶげに
頬をまもらせて
土偶のようにいもうとねむる
8 親友とわかれて
坂をくだる日の
あっぷるぱいのような夕暮れ
9 おとうとの冬
の
こどうを聴きながら
かむぱねるらのようにねむった
10 ふたりから
いつか
ひとりになる日々も
ぽたーじゅだけで生きのびてみる

【奨励賞候補】 吉沢 美香

1 雪が降る
楷書のように
2 雪の原血液型を教えあう
3 蝶の昼さりさりさりと砂時計
4 謝れるかもアネモネの中でなら
5 春風がふわりとつむじ見せてくる
6 夏の雨ほつそり伸びる祖父の脚
7 枝垂桜父許すことあきらめて
8 檸檬ひんやり
私の影も
9 秋夕焼リュックに揺れる鈴の音も
10 銀色はさびしいですか白長須鯨

林　桂

［大賞候補］ さいう

1　ほんだなの奥
　から
　ばにらの匂いの
　月　をとりだす
2　すいれんの閉じる
　に併せ
　ねむる祖母の
　まぶたに溜まる月光のあお
3　自傷行為
　として
　こおりを噛むときの
　日焼けしてゆくセーラーの襟
4　うみの声
　爆ぜるばかりの
　ゆうやみを閉じ込めている
5　翡翠のピアス
　にゃふ、にゃふと
　ふたつ咳き込む友の手に
6　あぶらつやめくゲルニカの模写
　ぽっぷこーんのあかるさは孤独
7　むーみんのように
　陽なたのあぜみちを
8　ぽちてぽちてと駆けるおとうと
　ずんむりと
　濡れたからだを引き上げて
　くるぶしに棲むにんぎょのなごり
9　くるぶしの
　淡いひかりを抱き寄せて
　聖書のように　ねむるいもうと
10　神託を受けた
　しょうじょの顔をして
　ほっとけーきのようにめざめる
11　せみとりに
　向かう
　背すじのりんとして
12　五さいになったおとうとは風
　じてんしゃで
　風
13　をおいこす
　夏の日のきみが
　せかいのはじまりだった
14　ぺんぎんの
　ひなを
15　ふたりで見つめれば
　むごんに春のひだまり満ちる
16　まがたまとして終戦の日をねむる
17　かいじゅうの
　ように
18　驟雨をなぎたおし
　きみの待つ駅まで駆け抜ける
　泣き終えた後のすっからかんの空
19　おうごんの
　うぶげに
　頬をまもらせて
　土偶のようにいもうとねむる
　花束を抱くとき樹木めくあばら
20　ぽにゅぽにゅと
　うさぎの耳
　を揉みながら
　もくれんの花ひらく日を待つ
　しおかぜに吹かれて
　春をまっている
　つぼみのような　ちわわのあたま

＊選評

さいう氏の作品を候補として推す。その理由は、作家としての独特の文体を獲得していて、一つの作品世界を展開しているからである。

ぽにゅぽにゅと
うさぎの耳
を揉みながら
もくれんの花ひらく日を待つ

短歌体のリズムを基本に、独自の改行を施し、与えられた五行以内のスペースを活用している。また、独特のオノマトペなどが使われ、穏やかで暖かみのある世界を演出している。この「さいうワールド」は、読者を楽しませる力がある。

おうごんの
うぶげに
頬をまもらせて
土偶のようにいもうとねむる

せみとりに
向かう
背すじのりんとして
五さいになったおとうとは風

くるぶしの
淡いひかりを抱き寄せて
聖書のように　ねむるいもうと

多く幼い弟妹が詠われる。もちろん、虚実不問である。作者が書くのは、そこに注がれる視線の暖かさである。家族として祖母や母も登場するが、母には鷹揚な抱擁力が与えられている。

作者の自画像も描かれる。

ぺんぎんの
ひなを
ふたりで見つめれば
むごんに春のひだまり満ちる

じてんしゃで
風
をおいこす
夏の日のきみが
せかいのはじまりだった

もちろん、事実を書いたかどうかは不問。精神の自画像が書かれていることは確かだろう。

まがたまとして終戦の日をねむる

ぽっぷこーんのあかるさは孤独

作品数は少ないが、俳句体の作品にも筆を伸ばしている。俳句体の方が、直接的に自身の内面へ降りてゆく形式となっている。短歌、俳句を合わせ鏡として読むと、世界は益々広く豊かになってゆく。

【奨励賞候補】 日下部　友奏

1　ホッキョクグマ色のマフラー
　ありがとう
2　トランペットのかたちに
　春の息を注ぐ
3　そうか、
　君の神様は春が好きなんだね
4　ルービックキューブ
　きらきら

抱卵期

5　感情の一覧にある百合の花
6　万緑と茶色い子犬の匂いが好き
7　そばかすはきりんの名残
　ソーダ水
8　洗濯のまっただなかにある裸足
9　秋を待つあなたの本棚を見たい
10　チンチラの砂浴び
　いずれ
　月の音

【奨励賞候補】 azusa

1　透明な星に座れば向こうにも
　鏡のように少年がいた
2　透明な水がふりつもった海の
　磯巾着に訪れる
3　夜
4　桜蕊降る自転車を停めていく
5　薔薇の雨シナモンロール温めて
6　病院の中にローソン花の雨
7　逢わないことがふつうになって
　ポプラ並木に影がある夜
8　水蜜桃ほどの透明感で泳ぐ
9　大通に粉雪宝石店に夜
10　病棟に消灯のある冬銀河
　息白くここは夜空が透きとおる街

龍　秀美

［大賞候補］　さいう

1　振り払うための
　かたちを保てない
　波浪のような　にんげんのうで
2　じだんだを
　すすきのように受け流す
　母の　ほっきょくぐまのまなざし
3　顔も知らぬ
　父の生家に向かうとき
　わたしウォーターリリーのつるぎ
4　うまれたての雲を
　両手におどらせる
　ようにあなたはピアノにふれる
5　飛んでいる
　鳥の翼の逆光は
　見上げるひとのためだけにある
6　十九のいま揺らぎつつ
　はつこいの終わり
7　へ
　まっさかさまの晴天
　感電のように
8　ひらめく
　夏に居て
　孤独はだれのみかたでもない
　水ふうせん
　ぱ、しゅんと砕き
　えいえんの汀の海を覗かせてやる

9　いぬの鼻の
　いつもひかりを吸うかたち
10　まがたまとして終戦の日をねむる
11　かいじゅうの
　ように
　驟雨をなぎたおし
12　きみの待つ駅まで駆け抜ける
　なのはなの新芽を
　なでてゆくように
13　きみがはじめて下の名を呼ぶ
　祖母の骨
　ひろう
14　右手のよどみなく
　思慕は五感のようにあやうい
　洗い終えた
15　犬のたましいごと撫でる
　ローファーの底
16　すこしずつ擦り減って
　そつぎょう、までの日々へ夕映え
17　花束を抱くとき樹木めくあばら
　まふらーをじっと
18　巻かれている祖母の
　ねむる仔ぐまのようなよこがお
　ぽにゅぽにゅと
　うさぎの耳
　を揉みながら
　もくれんの花ひらく日を待つ

19　叱られて
　ちんまりしゃがむ
　いもうとの
　しょうにゅうどうのような沈黙
20　おとうとの冬
　の
　こどうを聴きながら
　かむぱねるらのようにねむった

＊選評

今年度から選考方法が変わり、自選による応募に代えて総ての投稿作から選考委員が選ぶため、これまでの選考方法を見直すことにもなった。

まず、大賞一人と奨励賞二人、計三人を選ぶ作業を行った。

○月次総評からの選出数

まず、月次総評（龍選出の年間総数二二四）で多く選んだ三人を抜き出した。その結果は次のとおりとなった。

1　さいう（十一編）
2　長谷川柊香（八編）
3　雲理そら（六編）

○佳作選出数

次に今回事務局から提示されたデータ（龍選出のすべての佳作）から上位数人を抜き出した結果は次のようになった。（佳作数／投稿数）

1　さいう（三五／九九　選出率三五％）

2　田崎森太（三三／二二六　選出率十四％）
3　長谷川柊香（二六／九〇　選出率二九％）
4　雲理そら（八／七〇　選出率十一％）

この状態で月次総評選出数と佳作選出数とがどちらも高得点の作者十五名を選考の対象とした。なかでも大賞候補としては、どちらの基準も高得点であるさいうを最有力候補として念頭に置いた。

十五名の評価の基準として、以下の項目を立てた。

①詩歌句としての言語表現の力
②オリジナリティ（独自の物の見方）
③（文学としての）思想が優れている
④素材が新鮮で発見がある
⑤口語詩句としてふさわしい

このような評価基準で改めて十五名を見直した結果、大賞はやはりさいうがふさわしいと判断した。

○大賞推薦の理由

ここまで絞られた候補者には皆それぞれ独自のスタイル（文体／作風）がある。しかし、さいうには他と一線を画するようなものが感じられた。恣意的にスタイルを意識して作られたものではない必然性と、書かなければ生きていけない切実さのようなものが伝わってくる。これは天性のものだろう。そこには、生きていく上で必然として起こる外界と意識内部のぶつかり合いとしての痛みが生まれており、その繊細な痛みを捉える多彩な旋律が見える。

振り払うための
かたちを保てない
波浪のような　にんげんのうで

――人間は常に何かを峻別し拒否して生きなければならない。それにも拘らず、運命的にその力が与えられておらず、揺れ騒ぐ波のように心が定まらない。振り払う腕の動きに見事に造形されている。

祖母の骨
ひろう
右手のよどみなく
思慕は五感のようにあやうい

――同じようにこの句では、右手の仕草は身体としての確かさだが、心の動きである思慕は明確なかたちを取れないで漂う。身体と心が乖離する危うさを詠む。

飛んでいる
鳥の翼の逆光は
見上げるひとのためだけにある

――孤独を知る心は自分だけの立ち位置を択ばずにはいられない。それは向き合う相手とも共有できないものだ。視点の斬新さ。

さんずいの
ように
途切れたちんもくへ
きみは母音のといきをもらす

――この作品は『ことばの力詩集』（二〇二四年六月）で同月に五人の選者が取り上げた。前代未聞のことだ。しかも選者それぞれの解釈がバラエティに富み、さまざまな読みを許す多様性を持っていることが分かる。

さいうは質と量と、どちらも突出している。また、もう一つ突出しているのは「伸びしろ」の大きさだ。若さが持つ率直な作風と幅広いモチーフは自己模倣に陥らない自在さと新しい感性があり、逆説的に言ってみれば「文学的過ぎない」という長所を持つ。時に無作為と思われるほど率直にうたうが、これが才能であって、決して無邪気でも無作為でもない。これは今後の伸びしろの大きさを感じさせるものであり、口語詩句で他ジャンルと交わることによって、その領域を更に広げる力になればと願う。

【奨励賞候補】　長谷川柊香

1　ピアノさぼった僕を
　殴る母
　ねぎのにおいがした
　手の影を生む栞を抜くために

2

3　生まれる直前の
　逆に一人欠けているような
4　金魚は名前を付けると溶ける
5　信号無視して黄落に止まる父
6　輸送機の腹開き魚卵ほどに兵
7　虐殺文法買う塊肉を売る代わり
8　生者には影許されてしゃぼん玉
9　生という檻
　洞窟の壁画に吾を見つけ
10　キスして噛んで
　浮輪のように空気抜く

7　体操着
　ぬげた人から飛び降りる
　名前のワッペンだけを握って
8　つみあげた失敗で
　ジェンガをしている
　あなたが泣きやまないのに
　　夜が、
9　堂々と水飲む よわい花のまま
10　ずっと笑っている方の残像を撃つ

[奨励賞候補]　雲理そら

1　小石にも
　名をつけまわるぼくたちと
　神さまとならどっちがかわいい？
2　比喩のため
　つれてゆかれるカメレオン
3　天国じゃみんな、名前を忘れてて
　さいごのごはんの献立で呼ぶ
4　レジュメでは
　せせらぎさえも聴けるほど
　しずかなひるの東部戦線
5　遺伝子の海辺
　いなくなったあと
6　寂しくないようしおりを投げる
　死んだことある人は水っぽく笑う
　一周、太陽から遠いので